

ブリパソ2022 Virtus 北アニア・アジアゲームズ 競技大会

【実施報告書】



2023年1月

一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会

ANISA
All Nippon ID Sport Association

はじめに

去る、2019年に行われた、5回目を数える Virtus グローバル大会（ブリスベン）は、46の国と地域から1,000人を超えるアスリートがブリスベンに結集し、成功裡に終えることが出来ました。このように年々、発展し続ける Virtus の活動は、ついにオセアニア・アジア地域で初となる大会を開催するまでに成長し、特に Virtus の副会長でもあり、IPC の理事でもある Robyn 氏（オーストラリア）は、これまで Virtus スポーツに関わりが薄かったソロモン諸島などにも働きかけ、25カ国から600人のアスリート・スタッフが集まり、ブリスベン 2022 オセアニア・アジアゲームズ競技大会は大いに盛り上がりました。

また、2019年のグローバル大会から、正式にメダルレースとして採用された「ダウン症カテゴリー（Ⅱ2）」と「自閉症カテゴリー（Ⅱ3）」の2つの新しいカテゴリーは、今回も引きつづき実施するなど、その運用に関しては徐々に定着しつつあり、様々な面で非常に価値のある大会でした。

特に日本からは、悲願であったⅡ2のアスリートの派遣（柔道）が叶い、また、これまで派遣したことがない競技団体（自転車競技・バドミントン）の2競技団体、合計7競技団体（デモ競技を含む）派遣するなど、日本選手団におきましても、非常に大きな意味を持つ大会となりました。

更に、派遣された選手は、若い選手が多く、中には初めて海外に行くという選手もいる中、過去最高となるメダルを獲得することができ、国内における強化・育成も順調に進んでいることが分かり、今後非常に楽しみな結果を残してくれました。

最後に、同大会の開催まで、コロナ禍における影響もあり、日本選手団としての独自のコロナ対策、緊急事態におけるマニュアルの作成、それに伴う現地総領事館との連携・協力など、起こりうる不測の事態に対して、万全の準備をし安全に派遣できました。

ブリスベン Virtus オセアニア・アジアゲームズ 競技大会
日本選手団 団長
一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会
会長 斎藤 利之

<ブリスバノ2022Virtus 北アニア・アズ アグ -ムズ 競技大会概要>

1. 派遣期間
 - 大会期間：11月5日～11日
 - 開会式：11月5日
 - 閉会式：11月11日
2. 開催地
ブリスバン（オーストラリア キーンズランド州）
3. 運営主体
国際知的障がい者スポーツ連盟／大会組織委員会
4. 参加国と選手数及びボランティア
25の国と地域から600名以上のアスリート及びスタッフ（ボランティア250名以上）
5. 実施競技（デモ競技含む）
11競技（陸上競技、水泳、卓球、サイクリング、バスケットボール、柔道、0-イグ、トライアスロン、テニス、セーリング、※バドミントン） *下線部の競技が日本から参加
※バドミントンはデモ競技（その他、トライアスロンもデモ競技として開催）
※陸上競技、水泳、卓球、セーリングは国際競技団体（IF）の公認大会として実施
6. 大会ビジョン
A World where everyone is included through sport
7. 日本選手団の編成

No.	区 分	選 手		選手数 合計	スタッフ		役員 合計	合計
		男子	女子		男子	女子		
1	陸上競技	1	4	5	3	2	5	10
2	水泳	7	4	11	4	4	8	19
3	卓球	4	4	8	4	1	5	13
4	自転車競技	1	0	1	2	0	2	3
5	バスケットボール	8	0	8	1	0	1	9
6	柔道	4	1	5	2	1	3	8
7	バドミントン（デモ競技）	1	0	1	1	0	1	2
8	本部役員（団長含む）				5	3	8	8
合 計		26	13	39	22	11	33	72

主将：バスケットボール 渡辺 稜

旗手：柔道 小林 陸

団長：斎藤 利之（一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会 会長）

8. 派遣者名簿（別途）

9. クラス分け

本大会の陸上競技、水泳、卓球の国際競技大会団体（IF）登録選手の内、事前申請を行った選手については、パラリンピックへの参加条件となるクラス分けが実施され、日本選手は陸上競技1名、水泳3名、卓球6名の計10名が受検した。

10. メダル獲得数

No.	区 分	金メダル	銀メダル	銅メダル	合計
正式競技					
1	陸上競技	4	3	1	8
2	水泳	12	5	10	27
3	卓球	4	2	4	10
4	自転車	1	1	0	2
5	バスケットボール	0	1	0	1
6	柔道	4	1	0	5
合 計		25	13	15	53
デモンストレーション競技					
1	バドミントン	1	0	0	1
2	柔道	0	0	1	1
合 計		1	0	1	2

特記事項

- Virtus としてオセアニア・アジア地域で初めての総合競技大会として開催。
- 競技普及の観点から、II-3（自閉症）クラスの設定、陸上競技、水泳の II-1 クラスにおけるユース種目の設定、デモンストレーション競技（バドミントン、トライアスロン）の実施があった。
- 正式競技のメダルはオセアニア・アジア地域の選手を対象として授与された。

- 他の地域からの参加が認められた（コロナの影響で地域大会が出来なかった為）
- デモンストレーション競技、II-3 クラスの種目で 1-3 位の成績を収めた選手等については、デザインの異なるデモンストレーションメダルが授与された。
- 地域外の選手が 1-3 位の成績を収めた場合についても、デモンストレーションメダルが授与された。
- 表彰式（メダルセレモニー）は、正式競技種目とデモンストレーション競技・種目を分けて実施された。
- 今大会におけるメダル授与の基準とその適用について、一部の競技で課題が見えた



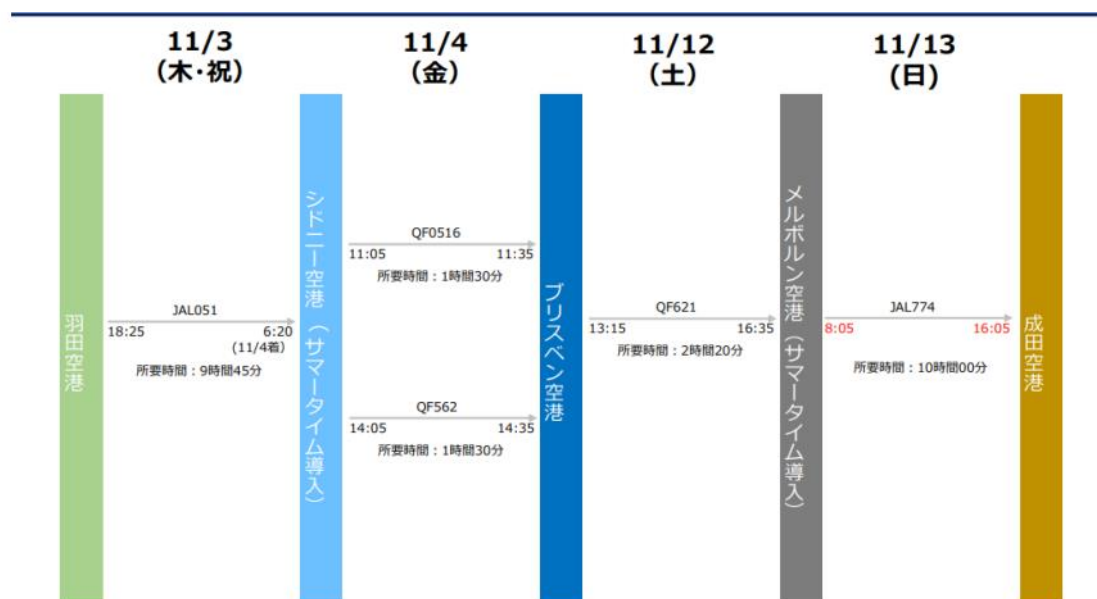
金メダル



デモンストレーションメダル

実施競技	競技会場
陸上	Queensland Sport & Athletics Centre
バドミントン	Chandler Arena, Sleeman Sports Complex
自転車(トラック)	Anna Meares Velodrome, Sleeman Sports Complex
自転車(ロード)	RACQ Mobility Centre
柔道	Chandler Theatre, Sleeman Sports Complex
水泳	Brisbane Aquatic Centre, Sleeman Sports Complex
卓球	Anna Meares Velodrome, Sleeman Sports Complex
バスケットボール	Chandler Arena, Sleeman Sports Complex
ボート	Queensland State Rowing Centre
セーリング	Southport Yacht Club Hollywell
トライアスロン	Gold Coast Performance Centre

11. 渡航スケジュール



●無料預け荷物規定

JAL (国際線) : 1名あたり、23kg/203cm以内 5個まで
 QF (国内線) : 1名あたり、23kg/158cm以内 1個まで

***** (以下、ANiSA 杉国際担当の報告) *****

今回、日本代表選手団ブリスベン派遣においては、各種競技団体のご協力と日本パラスポーツ協会(JPSA)日本パラリンピック委員会の長年の経験と協働支援があつてこそ、選手を安全に渡航させ、また心身共に健康な状態を保つことが出来たことに深く感謝申し上げます。

私自身初めて知的障がい者のスポーツ競技団体の帯同、また海外での競技会の参加であり、一連の仕組みを知る上で大変貴重な経験をさせていただいたこと、更に知的障がい者のスポーツでのEqual Opportunityの必要性について改めて開眼させていただき、次回大会への参加意欲の向上につながりました。

【事前準備】

本部総務として参加をさせていただきましたので、公式行事の取りまとめや選手団の現地での活動に係る事務的処理が主な業務内容でした。更に、選手の生活環境の向上に努める事も意識していました。しかし、事前の準備からは組織委員会からの情報量が少なく自分に何ができてどう他の担当者と協働できるのか、わからないことが多かったと思います。しかし実際にVIRTUS—OAgamesへ参加すると、事前準備においてアクレディテーションカードの作成は大会参加にとって大変重要で、選手他コーチ等の情報収集は期限前までに正確にかつ迅速に行う必要があること、だからこそスムーズな会場への出入りやシャトルバス乗車ができ競技参加者が安心安全に行動できる土台となる事を知ることが出来ました。更に、競技エントリーやクラス分けも同時に重要で、特にパラリンピック競技となっている種目に関しては、今後の選手生活を大きく左右する重要な事柄であることが大会を通して確認できました。

移動に関するロジスティックスについても、事前に話し合いがありましたが、これも組織委員会からの連絡の滞りなどが影響し、近畿日本ツーリストとの事前の打合せにも大きく影響が出てしまった為、ホテル滞在にあたり総務としてアスリートの生活環境整備が充分出来なかったのはジレンマでした。特にアスリートの個別の特性を考えると環境整備が必要と考えていたので、情報がない、わからない、というのがストレスに感じました。

しかし、滞りにあたりアスリート達が新しい環境に果敢に順応しようとしていたの見て、障がいとは別に個々のバイタリティーの高さを感じました。環境整備は大事ですが、アスリートの個々の裁量を信じる事も必要な総務としての心の準備だという事がわかりました。但し、海外への渡航に関しては入国に必要なビザの申請や日本帰国の際のワクチン接種証明書などの事務的書類準備などは、アスリートだけでなく競技団体と協力して早く準備をしておく必要があると思います。

【輸送】

どこの空港においてもチェックインには時間と労力、そして旅行会社との連携が必要であることを痛感しました。自分の身の回りのものを管理できれば問題ないような個人旅行とは違い、70人以上の人間を同時に飛行機へ搭乗させ、更に競技道具や特殊なやり投げの槍なども、事前の通関への申請や航空会社への連絡が必要となっている事は事前準備がいかに大切か物語っていました。1時間以上時間がかかるも、特段の問題が無くチェックインがスムーズに行えたことは選手の皆さんも比較的ストレスがなかったのではないのでしょうか。

そして今回のように、乗り換えの際に 2 グループに分かれ別々の便で目的地への搭乗をするなど、待機時間や搭乗口が違い、更にアスリートには障がいがあることを考えると難しいイメージしかなかった自身にとって、輸送を理解している近畿日本ツーリストのチームとの連携が欠かせず、本当に頼りになるチームだと実感しました。

【大会参加】

競技場へのシャトルバスは基本的に 3 か所のホテルからアスリートを乗せそれぞれ主要 3 か所の競技場へ輸送が大会 2 日目から開始されました。しかし、午後の開会式当日にはまだシャトルバスは運行されておらず、事前に会場チェックをし、練習がしたい競技団体においては公営バスを利用するほかならず、私自身がバスケットボールチームとバドミントンチームをバスで引率する事態となりました。初めて来た国で 2 日目に自分たちでバスに乗車し競技場まで行くのは、競技団体としてもかなり大変な移動だと思い、そういった意味では、大会を主催するのであれば運行について明確なスケジュールがあらかじめ分かっていた方が参加国にとっては良かったと思います。競技会場への流れが確保されれば競技団体が自ら予定通りに会場へ行く姿が見られ、本部総務としてもやっと安心することが出来ました。

大会期間中は、総務として競技結果や競技予定順の確認業務については初めての事が多くお手伝いできる事が少なかったが、医療、看護、衛生の視点で、アスリートの体調もしくは調子を見て観察していました。必要な業務としてではないですが、朝食からアスリートを観察して消毒はもちろんのこと、顔色、食べている食事の様子、食事バランスなど、助言ができる事が無いのか考え、出来るだけ健康な生活ができるよう見守っていました。帰国をしてからコロナ陽性者が出たことは大変残念でしたが、大会を通して体調不良者や怪我人がほとんどなく競技に参加でき、無事に帰国できたことは良かったと思います。

また、「本部の人」というよりも、一人の人間としてアスリートとの関係性を築くように心がけていました。日頃より社会福祉施設に身を置き、重度の知的障がい者の生活の支援や就労支援事業所を運営している事もあり、様々な個々の特性や個別性を会話の中から感じる事ができ、アスリートとのかけがえのない時間を過ごすことが出来ました。特に、競技団体の監督ともお話することができ、日頃知的障がい者のアスリートが連盟とどのような関係性を築いているのか、またアスリートの就職先の対応や競技参加への理解がどのようなものなのか話を聞くことが出来ましたので、障がい者を雇用している者としても、今後そういった知的障がい者アスリートの雇用についても見直しをしなければと思いました。

最後に、私の経験と能力を信じ、新しい経験を用意してくださった団長へ改めて感謝をさせていただきます、引き続き、知的障がい者スポーツのノーマライゼーションへ少しでも寄与できるようお手伝いできればと思っております。

*** (以下、帯同医師(平野医師)の報告) ***

●はじめに

2022年11月5日から11月11日までオーストラリアのブリズベンにてブリズベン 2022 Virtus Global Games が開催された。この大会期間前及び同期間中、日本代表選手団本部医師として帯同した。

●日本選手団

72名【選手39名(男子26名、女子13名)、スタッフ33名(男性22名、女性11名)】であった。

●日本選手出場競技(6競技+*デモンストレーション競技1競技)

陸上競技、バスケットボール、自転車、水泳、卓球、柔道+*バドミントン

●気象

朝晩は涼しく、日中はほぼ晴天で、日本の初夏のような過ごしやすい毎日であった。

●ホテル(iBis Styles)

フロント近くに噴射状のアルコール消毒が設置されていた。部屋は広く清潔であった。浴室はバスタブなしのシャワーのみであった。空調は自分で調節でき、快適な室温を保てる環境であった。

●メディカルルーム

ホテルの一室を医務室として設置した。9時から17時まで開放し、それ以外の時間帯は個別対応とした。

●食事

朝食・夕食は、ホテルダイニングでビュッフェ形式。メニューにあまり変化は見られなかったが、足りない栄養は選手各自で食事を持参し、栄養バランスがとれるように工夫していた。昼食は、各会場ごとにカレーやパン等のランチボックスが用意されていた。

(新型コロナウイルス感染症対策の観点から)

ホテルの食事会場は、ダイニングの入口付近に噴射状のアルコール消毒が設置されていたが、海外の選手やスタッフも含めて、ほとんど使用している人はいなかった。ビュッフェ形式の食事では、各自が共通のトングで食材を取り分ける形であった。新型コロナウイルス感染症対策の為、日本選手団としてはトング使用前、使用后(食事前)に手指消毒を行い、食事中は会話はできるだけ控えることとした。

●競技会場の医療体制、衛生環境等

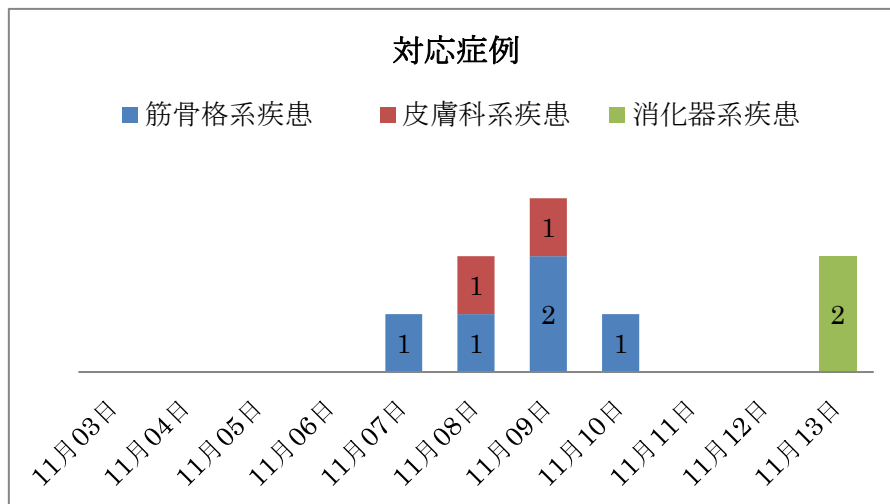
どの会場も、First aid の部屋が設置されており、車いすやストレッチャーが準備されていた。各会場入口には、アルコール消毒が設置されていた。特に陸上競技場と柔道場では、負傷者が発生した場合にすぐにドクターが駆けつけることができるように、それぞれトラック外すぐそば(陸上)と試合場内(柔道)にメディカルブースがあり、救急バッグの準備とドクターの待機という万全の体制が整えられていた。それに加えて陸上競技場では、場外に救急車及びパラメディカルスタッフも待機していた。室内競技では、空調が調節され、選手たちがプレーしやすいような快適な環境に保たれていた。

●対応症例 9 例

筋骨格系疾患 5 例（脱水による筋痙攣・こむら返り 1 例、運動過負荷による筋肉痛・筋疲労 4 例）

皮膚科系疾患 2 例（汗による湿疹 1 例、外傷性水疱 1 例）

消化器系疾患 2 例（緊張による気分不良 1 例、発熱・悪寒・咽頭痛 1 例）



11月7日～11月10日の7例は、全て選手への対応、11月13日の2例は、選手1名、スタッフ1名への対応であった。

●ドーピング検査 日本選手団は7名の検査が実施された。（全て競技会検査で尿検体を提出）

11月8日；水泳（男子2名、女子1名）、11月10日；卓球（男子2名、女子2名）

●総括

出国前の業務として、新型コロナウイルス感染症対策、携行医薬品の確認・追加購入依頼等の作業、JPC からの診断書に基づいた選手・コーチ・役員の健康状態の把握、服薬状況の確認作業、カルテの作成を行いました。その中でも新型コロナウイルス感染症対策に関しては、特に重点を置きました。日々変化する日本国内での感染状況、日本出入国時の検査・感染対策、プリズベンでの感染状況・感染対策等についてその動きを把握することから始めました。今大会での日本選手団としての新型コロナウイルス感染症対策についての計画は、バーレーンで2021年12月に行われたアジアユースパラ競技大会での日本選手団の新型コロナウイルス感染症対策の内容を参考にしながら、本部スタッフ全員で協議し作成しました。大会参加者に対しては、全員に体調チェックシートを配布し、出発前14日から、毎日の検温、日々の体調管理を行っていただきました。体調不良や新型コロナウイルス感染症が疑われる場合には、各競技団体のチームドクターに報告、相談する体制を整えました。大会としては、特別な新型コロナウイルス感染症対策といったものはありませんでしたが、日本選手団としては、日本国内での日々の生活同様に手洗い、手指消毒、競技・トレーニング中以外での不織布マスクの着用を徹底することとしました。

大会期間中は、本部医師1名体制で9時から17時までメディカルルームを開放、その他の時間帯は個別での対応とし、24時間日本選手団の皆様をサポートできる体制をとりました。体調不調の際には早めに相談していただくように監督会議等を通して呼びかけを行っていたこともあり、大会期間中は7例(複数回受診した方も含む)、大会後から帰国までが2例の合計9例の対

応で、重症者が出ることなく全員が無事に帰国できました。本当に良かったと思っています。今回、海外遠征は初めてといった選手や海外という普段とは違う環境での生活で、不安や緊張を抱えていた選手も少なくなかったかと思いますが、競技を終えて帰国時には、自信にあふれ、笑顔で結果や大会期間中の様子を報告に来て下さった姿には、とても感銘を受けました。

●謝辞

日本パラリンピック委員会及び全日本知的障がい者スポーツ協会の関係者の皆様に対し、御多忙の中、大会前から万全な準備をしていただけたこと、そしてこのような貴重な経験をさせていただけたことに対し、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

*** (以下、陸上競技の報告) ***

全種目メダル獲得と投擲種目の世界記録更新を当初の目的とし、強化指定選手から 5 名の選手選出、10 種目に参加し、全種目入賞(金4 銀3 銅1)であった。結果に対する評価としては、3 年ぶりに試合参加形式の合宿を実施し、大会前に地元コーチ、支援者との連携や、巡回指導の成果が特に大きいと感じた。

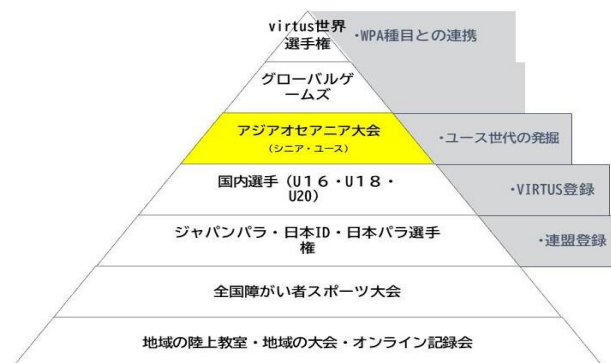
- 1 オンラインミーティングの実施
- 2 OA 大会一カ月前の直前合宿の実施
- 3 健常者の陸上競技大会参加(兵庫秋季大会)による地元コーチとの連携、アップ時の動作確認
- 4 連盟コーチが種目ごとに巡回指導の実施(跳躍、短距離、投擲)
- 5 選手共有シート、大会期間中のアップメニューのリクエストフォームによる連盟、地元コーチ、支援者の連携
- 6 トレーナー帯同による、海外大会による長期間におけるケアと、試合終了者のコンディショニングづくりのフォロー指導
- 7 選手・スタッフ選考委員会の発足による、大会参加の最大目的を重視した選考派遣
- 8 帯同スタッフ同士の綿密な連携と、役割の明確化
- 9 競技支援、生活支援の役割分担(スタッフと選手が負担にならない連携づくり)

各国の参加状況については、アジアオセアニア地区以外の参加もあったが、クラス分けを目的とした参加国もあった。また、オーストラリアを中心に II-2(ダウン症アスリート)の参加があり、投擲、短距離、跳躍で活躍する場面が見られた。また、WPA 競技規則に準じ、スターティングブロック設置申請等の活用で、アシスタントなしでの競技運営は今後、日本での競技会実施の際に大会運営で大きな参考となった。

競技の情勢と課題

- 1 国内の他競技のユース世代参加。各種大会ランクの明確化、国際大会経験の重要性を再認識。
- 2 早い段階での virtus 登録。国内でスムーズに登録手続きができる医療関係との連携。
- 3 国際大会選手の費用自己負担。資金面による大会参加が困難な選手への解決策。
- 4 ベストコンディションの維持、記録更新のための条件(風向き等)を常に考慮した指導の在り方

Virtus 種目のヒエラルキー イメージ



陸上競技成績

氏名	年	エントリー種目	記録(風力)	予選	備考	成績
阿利 美咲	28	女子 1500m	5.12.69			銅
		女子 3000m	11.20.01			金
		女子 5000m	19.48.46			金
川口 穂菜美	25	女子やり投	38.86			金
菅野 新菜	20	女子 200m	27.09(-0.7)			銀
		女子 400m	61.09	1位通過	59.86 自己ベスト	銀
酒井 園実	25	女子 100m	13.74(-2.4)			銀
		女子走幅跳	5.20(+0.7)		上位選手が地域外の 参加選手のため繰り 上げ	金
小久保 寛太	23	男子 100m	12.22(-1.9)予選	2位通過	12.32(-3.9) 決勝	入賞
		男子走幅跳	6.42m(+0.0)		4位入賞	入賞



(文責)奥松美恵子

*** (以下、自転車競技の報告) ***

1、当初目標と結果

今大会はタイムトライアル、ロードレースの二種目の競技にエントリーをした。目標はタイムトライアル上位入賞、ロードレースは優勝を掲げレースに参加。結果としてタイムトライアルは準優勝、ロードレースは優勝でレースを終えることができた。周りに公言することで目標を明確化し練習を積み重ね、結果として自身の力が発揮でき良い結果に繋げることができたことと認識できた。また今回の結果から世界で通用できると認識できた。

当日エントリーしていなかったチーム(2名)タイムトライアルに急遽インドの選手とチームを組んで出走することになった。最初はメダルは無いと言われていたが表彰式ではデモンストレーション競技用の銅メダルを授与して頂けることになった。

2、結果に対する評価と課題

タイムトライアルは前日の試走ができなかった。コースの情報(コース内容を撮影した動画など)もなく当日の朝に少し試走しただけだった。コースでライン取りやブレーキングなどどのように対応するかの指導も適格にできない状態でレーススタートになった。結果1位の選手に51秒差をつけられた。目標としては表彰台だったので達成はできたが事前の対策ができる事が望ましかった。次回の大会ではコースの試走時間など改善を望みたい。

ロードレースでは前日のレース結果を踏まえマークする選手を伝え警戒をしながらのレースを行った。14周回のレースで11周までは特に大きな動きはなかった。残り3周回から何度かアタックを繰り返したが他の選手を引き離すことができなかった。全体的なパワーアップが必要と感じた。今大会の結果を踏まえ豪州の選手も練習を積み重ねてくると思われるのでさらに練習を積み重ねていきたい。

3、感想

自転車競技では初めての参加となるということもあり海外の選手の情報などが少なく前大会のリザルトでの判断のみであった。前大会では下位にいた豪州の選手もレベルアップした選手がいたのでリザルトだけでは判断ができない部分もあった。次回のフランス大会ではその反省を生かしていきたい。

大会直前の練習や体調管理も順調に行うことができたことでいつも通りの力が発揮できた。今大会ではタイムスケジュールの変更や競技内容(距離の短縮)の変更もあったが戸惑うことなくレースを終えられた。海外経験も初めてで体調面や食事面も心配されたが問題なく過ごすことができ適応能力があると評価できた。

4.参加国と参加人数

	オーストラリア	日本	インド
タイムトライアル(男子)	10人	1人	1人
タイムトライアル(女子)	4人	0人	0人
チームタイムトライアル(男子)	2チーム	1チーム ※	
チームタイムトライアル(男女混合)	2チーム	0チーム	0チーム
ロードレース(男子)	8人	1人	1人
ロードレース(女子)	2人	0人	0人
200mフライング(女子)	2人	0人	0人
200mフライング(男子)	7人	0人	0人
1kmTT(男子)	6人	0人	0人
500mTT(女子)	2人	0人	0人
スクラッチ 5km	7人	0人	0人
3kmパシュート(女子)	2人	0人	0人
3kmパシュート(男子)	6人	0人	0人

※レース当日審判からの提案で急遽チームを組んでレースに参加

5. 結果

氏名	性別	年齢	エントリー種目	出走数	記録	順位	成績	備考
大谷春樹	男	19	男子 40kmロードレース	10人	1.05:34	1位	金メダル	
			男子 10kmタイムトライアル	12人	17:38.85	2位	銀メダル	

(文責)大谷 正樹

今大会において自転車競技は初参加であったため、日本選手団本部と日本パラサイクリング連盟には情報収集の点で大変な労力を割いて自転車チームがレース当日に実力を十分に発揮できるようにサポートしていただき、心より感謝を申し上げます。

チームとして今回の目標は、「ロード、個人 TT のどちらかで表彰台に乗ること」と定めていた。結果はロードで1位・個人 TT で2位と、当初の目標を大きく上回る結果となった。

個人の目標としては、「普段通りの仕事を普段とは異なる環境でも遂行し、選手の実力が最大限発揮するように振る舞うこと」として大会に臨んだ。レース前・当日の準備、通訳が主な業務であったが、普段から使っている機材を準備し、選手・監督との事前ミーティングでコミュニケーションをとり必要備品の確認など行い、選手がレース本番でトラブルに巻き込まれることなくレースに臨むことができたので、自分の仕事は十分にこなせたと思う。今大会は、選手と監督にとっては初の国際大会で、言葉・生活環境などが大きく異なるなかで大変な苦勞をされて

いたが、自分がコーディネーターとして期間中の生活や大会のサポートし、選手団本部とも協力することで乗り越えることができた。

他国の参加状況は、オーストラリア約15人、日本1人、インド1人と、オセアニア・アジア大会と銘打っていたもののアジア地区の参加選手が非常に少なかった。特に女子選手はオーストラリアのみ参加で、他国も女子選手の発掘に非常に苦労しているという話を伺った。オーストラリアは、自転車選手団の競技人口が少ないトライアスロンにも参加しているということであった。

レースの所感は、大谷選手は初の国際大会であったけれどもまったく緊張することなく自分の力を十二分に発揮してくれたと思う。距離が短いけれども多少の起伏を繰り返すコースというのも大谷選手に有利に働いたと思う。大谷選手の強みは「登り」であったのでロードレースでは登りで他国の選手を引き離す作戦であったが、最後は小集団でのスプリントゴールになったので、得意の登りで振り切れなかったことは今後の課題となると思う。オセアニア・アジア大会では勝つことができたが、もっと規模の大きな大会では更に強力な選手が現れると思うので、今後のトレーニングの目標として頑張ってもらいたい。

大会運営の面では、事前に得られる情報が少なく、本番前日の夜にならないと詳細な情報が得られないという事態が相次ぎ、自転車競技は大会期間中2日間しかレースは無かったけれども事前準備や行動に苦労した。日本選手団本部も「自転車は初参加」ということで対応に苦慮されていたので、自転車チーム自ら情報を集めるしかなかった。

また他競技とは会場が遠く離れていたため、自転車競技の会場にサポートに来ていただいた斎藤団長・総務の杉氏には心よりお礼を申し上げる。

最後に、自転車競技に参加した選手の大半が大谷選手と同世代の選手たちだったので、大谷選手には生涯のライバルとして彼らと世界の舞台で切磋琢磨するとともに、オセアニア・アジアチャンピオンとして、日本の競技人口拡大の一翼を担ってほしいと願う。



(文責)梅澤 和功

*** (以下、バスケットボールの報告) ***

1. 当初の目標と結果

<当初の目標>:優勝

<結果>:準優勝

2. 結果に対する評価

年間3回という合宿の成果を発揮することはできた。

3. 課題

身体の強さ(フィジカル)や身体の大きさ(サイズ)をどのように対策していくか、選手の発掘や育成に大きな課題がある。

4. 感想

今大会は、オセアニア・アジア地区ということもあり、各地区2カ国の計4カ国は出場してくると思いきや意欲をもって参加した。男子チームとしては、5年ぶりの国際大会でもあり、合宿も複数回重ねてきた。合宿以外にもオンライントレーニングや日々の体調報告など、生活習慣から日々のトレーニングまでサポートし取り組んできた。今回は、国際試合の経験が浅い選手もあり、大会期間中は、あまり緊張しない環境作りに努めた。ゲームに関しては、チームの雰囲気よく、フィジカルも多少対応でき、日本チームの武器であるスピードは通用した。しかし、平均身長でかなり上回る AUS に対し、ゴールを守ることは容易ではなかった。

今後は、課題であるフィジカル、サイズに対抗する作戦、中長距離のシュート率向上と、世界で戦うために、必要な武器を鍛えることは必要であり、次回のグローバル・ゲームスフランス大会に臨みたい。

5. 各国の参加状況

<男子>オーストラリア、日本(2カ国)

<女子>オーストラリア、フランス(2カ国、4チーム)

6. 競技の情勢

今回は、男子:オセアニア1カ国・アジア1カ国、女子:オセアニア1カ国の参加だった。オセアニア・アジア地区の競技力向上のためには、参加国を増やすことは急務と思われる。

【資料】

① 参加人数

<男子>

参加国	オーストラリア	日本
選手人数	11	8

<女子>

参加国	オーストラリア A	オーストラリア B	オーストラリア C	フランス
選手	4	4	4	5

② 競技結果

<Men's Game>(5×5)

Date	Time	Competition	Round Semi Final
7/11/2022	9:00	○ AUS 81 vs 76 JAP ●	Game1
7/11/2022	17:00	● JAP 68 vs 91 AUS ○	Game2
8/11/2022	17:00	○ AUS 87 vs 54 JAP ●	Game3
9/11/2022	13:00	● JAP 59 vs 82 AUS ○	Game4

<Women's Game>(3×3)

Date	Time	Competition	Round Semi Final
7/11/2022	10:30	○ AUS1 21 vs 5 FRA ●	Round1
7/11/2022	11:00	○ AUS2 9 vs 3 AUS3 ●	Round1
7/11/2022	16:00	● FRA 9 vs 11 AUS2 ○	Round1
7/11/2022	16:30	●AUS3 14 vs 16 AUS1 ○	Round1
8/11/2022	10:30	○ AUS3 11 vs 9 FRA ●	Round1
8/11/2022	11:00	○AUS1 14 vs 10 AUS2 ●	Round1
8/11/2022	16:00	○ AUS2 13 vs 8 AUS3 ●	Semi Final
8/11/2022	16:30	○ AUS1 20 vs 6 FRA ●	Semi Final
9/11/2022	11:00	○ FRA 10 vs 11 AUS6 ●	3 rd &4 th Place
9/11/2022	11:30	○AUS1 12 vs 6 AUS2 ●	Final



(文責)谷口英謙

*** (以下、卓球の報告) ***

卓球チーム : 日本選手団

連盟コーチ : 長谷部 攝 (ただし) 総監督、吉田 真由美 女子監督兼総務

母体コーチ : 阿部 博幸、宇津宮 和孝、石谷 正信

男子選手 : 吉川 碧人、原 一、山本 駿太、吉田 友也

女子選手 : 川崎 歩実、山口 美也、和田なつき、太田 歩美

《スケジュール》 11月3日～11月13日

3日 空港集合 ～ ブリスベンに向けて出発

4日 シドニー経由ブリスベン到着～ホテル到着～ クラス分けテスト(2名) 監督会議

5日 クラス分けテスト(4名)+ホテル近郊散策 ～ 開会式 出席

6日 クラス分けテスト(4名)+練習1日目 ～ 開会式

7日 クラス分けテスト(2名) + 練習2日目 + technical Mtg(監督)

8日 試合1日目(男女 シングルス 決勝 まで男女ダブルス 8 まで)

9日 試合2日目(男子ダブルス4 まで、女子ダブルスリーグ戦、ミックスダブルス 4 まで)

10日 試合最終日(男子ダブルス 決勝 まで 女子ダブルスリーグ戦 ミックスダブルス 決勝)

最終日、試合後に原、山本、和田、山口がアンチ・ドーピング検査

11日 出国手続き説明会～ 博物館、買い物 ～ 閉会式 出席

12日 ブリスベン～メルボルンへ チームMtgと個別Mtg(ひとり5分～10分×8名)

13日 早朝 メルボルン空港 ～ 成田着 ～ 解散

1. 《テーマ》

日本代表として日の丸を胸に自信と誇りを持って戦い抜く！

2. 目標と結果

	目標	結果
金メダル	2	4
銀メダル	1	2
銅メダル	3	4
合計	6	10

メダル獲得数は目標より良い成績であったが、男子1名がメダルを獲得することができず残念であった。

3. VIRTUS2022における卓球チームの取り組み・男女監督の狙いと取り組み

① 監督・コーチ・選手が競技に立ち向かう心構え・基本となる精神をはっきりさせた。

「日本代表として、日の丸を胸に、自身と誇りを持って、最後まで戦い抜く!!」のチームスローガンと監督・コーチの5人の思いを全選手に紙媒体で配布し協議に臨んだ。

② 毎日、全体ミーティングとスタッフミーティングを開催し、情報共有と意思統一を図った。

③ ベンチコーチは選手が最高のパフォーマンスを発揮するため、試合ごとに極力変更しない。連盟・母体にこだわらず、選手が一番力を発揮できるコーチがベンチに入る。

④ チーム JAPAN・チーム一丸には、選手よりも監督・コーチ一丸が大事で難しい。監督・コーチ5人の役割分担、適材適所、利己主義の撤廃、協力体制の構築に配慮する。

⑤ 今大会での1番の目標、最終目標は、VIRTUSのメダル獲得ではない。選手と連盟の最終目標は「パラリンピックでのメダルであり、選手の人間性の向上」であること。今大会は「目標へのスタートであること。」を選手と母体コーチに「はっきり認識してもらうこと。」が男女監督の狙いであった。

4. 課題

○ 各国の参加状況、競技の情勢

今回、韓国は不参加であったが、同時期開催の世界選手権で2名がメダル獲得している。今後はアジアでは、韓国、台北、香港、今回の躍進が目立ったインドネシアの4か国がライバルとなるであろう。

○ 卓球連盟内部に多くの改善点があることを感じた。

- ① 事前の海外の情報収集が足りなかった。また、コーチ2名は初遠征であったために遠征の方針、目的、目標を具体的に伝えておく必要があった。
- ② 東京パラリンピックの結果と、今回の世界選手権、VIRTUS、数回の強化合宿の反省を踏まえ、強化戦略プランを理事だけでなく全コーチに周知し検証の必要である。
- ③ パリパラリンピックに向けて、HPD、強化戦略委員会、連盟コーチ、母体コーチで情報共有と意思統一をもっと明確にする必要性を感じた。

5. 感想

今回の参加選手は8人のうち6人が、初の海外遠征であり、有望な若手選手であった。長距離移動、クラス分け、ドーピングコントロール、他国の文化、食事、チームメイト、スタッフとの人間関係、信頼関係、メダル獲得などとても有意義なものであった。

6. 卓球 参加国 12か国 参加人数 男子 28名 女子 13名 合計 41名

7. 個人成績結果 一覧表

No.	氏名	シングルス	ダブルス	ミックス
男子				
1	吉川 碧人	ベスト16	ベスト8	銅
2	原 一	銀	金	銀
3	山本 駿太	銅	金	金
4	吉田 友也	ベスト16	ベスト8	
女子				
5	川崎 歩実	銅	金	銅
6	山口 美也	金	金	銀
7	和田なつき	ベスト8	銅	金
8	太田歩美	ベスト8	銅	

8. 国別メダル獲得一覧表

		金	銀	銅	銅
男子	シングルス	台北	日本	日本	台北
	ダブルス	日本	台北	インドネシア	香港
女子	シングルス	日本	香港	日本	台北
	ダブルス	日本	台北	日本	
ミックス		日本	日本	日本	台北

9. 参加国及び参加数

No.	国名	参加人数		シングルス		ダブルス		ミックス
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	
1	日本	4	4	4	4	2	2	3
2	エクアドル	1	1	1	1			1
3	香港 (中国)	7	3	7	3	3	1	1
4	インドネシア	3		3		1		
5	インド	2		2				
6	マカオ (中国)	3	2	3	2	1	1	
7	マレーシア	2		2				
8	パラオ	1		1				
9	ソロモン諸島	1		1				
10	フィリピン	1		1				
11	チャイニーズ台北	2	2	2	2		1	1
12	フィジー	1	1	1	1			
12か国	計	28	13	28	13	7	5	6

(文責)長谷部 攝

*** (以下、水泳の報告) ***

1. 当初目標と結果

当初のメダル獲得目標は、金メダル 2 個、銀メダル1個、銅メダル2個、計5個であった。また、出場選手全員が入賞すること、18 歳以下の選手たちが海外の選手と競う経験の獲得と国際大会での自己ベスト更新を目標とした。

その結果、金メダル 12 個、銀メダル 5 個、銅メダル 10 個、計 27 個、参加選手全員がメダルを獲得した。また、6 つの世界新記録、8 つのアジア新記録、1 つの日本新記録をマークした。

2. 結果に対する評価

選手選考にあたっては、2022 年 8 月現在の World Para Swimming(WPS)世界ランキングから、オセアニア・アジア地域選手のみを抽出しランキングを作成した。2019 年にオーストラリア・ブリスベンで行われた INAS Global Games では、WPS 世界選手権のメダリストやファイナリストが多数出場しており、過去の INAS Global Games や INAS Swimming Championships とは出場選手層の競技レベルが一段と高くなっていた。そのため、今回目標とした出場選手全員入賞を達成するために、作成したランキングの 8 位以内の選手である、男子 7 名、女子 4 名、計 11 名の選手を選考した。

今大会の出場選手は結果的にオーストラリアをはじめ、競技レベルの高い選手はあまり参加をしていなかった。そのため、目標であったメダル獲得合計5つを大きく上回る、合計 27 個のメダルを獲得することができた。出場した選手全員がメダルを手にする事ができたことは非常にうれしいことであった。また、今大会では世界、アジア、日本をあわせた Virtus 新記録を 15 個マークすることができ、INAS Global Games が行われた 3 年前よりも今大会に参加した日本選手の競技レベルが上がっていることが確認できた。ただ、ベスト記録を更新できなかった選手もいたため、国際大会でベストの力が発揮できるように今後も努力を重ねていく必要がある。

3. 課題

水泳の場合、通常、1日に予選と決勝の 2 レースを泳ぐ必要がある。予選を通過するためには予選から全力で泳ぐ必要があるが、決勝でメダルを獲得するためにはさらにタイムを上げる必要がある。今回、多くの選手はタイムを上げることができたが、若手の選手は複数の種目でタイムを落とすこととなった。国内で開催されている大会の多くは、タイム決勝であり、1 日 1 本しか泳がないことが多い。今後、国際大会等で経験を積み、決勝で予選よりタイムをあげられるようにすることが必要である。

4. 各国の参加状況

今大会の水泳の参加国は、オセアニア・アジア 13 カ国と、オープン参加 2 カ国の計 15 カ国であった。13 カ国は、日本、オーストラリア・ニュージーランド、フィリピン、香港、台湾、シンガポール、フィジー、マレーシア、マカオ、インドネシア、コロンビア、タイであり、2 カ国はアメリカ、ブラジルであった。開催国であるオーストラリアの選手が最も多かった。

競技成績は、日本のほか、オーストラリアと香港の選手が強かった。特に、男子はオーストラリア、女子は香港の選手が活躍する傾向にあった。

5. 感想

まず、まだ収まらないコロナ禍の中、国際大会を開催していただけたこと、また、日本として参加できたことに感謝申し上げたい。また、日本選手団全員が現地にて無事に競技に参加し戦えたことを喜びたいと思う。この場をかりて、関係者のみなさまにお礼申し上げます。

しかし、大会の運営については困難もたくさんみられた。最も困ったのは競技スケジュールが出発3日前まで発表されなかったことである。選手は直前まで仮エントリー出場種目の練習をせざるを得なく、困惑もみられた。すぐにエントリーの差し替えを提出したものの、現地エントリーリストに反映されておらず、問い合わせ・調整に時間がかかった。

輸送や大会当日の運営はスムーズであり、また現地会場での各種対応は親身に行ってもらえた。ただ、プール会場の入場時間が事前の情報と異なり、予選前のメインプールでのウォーミングアップ時間が非常に短いものだった。競技期間を通して変更はできないとのことだったので、チーム内で対策を考えて対応をした。

Virtus オセアニア・アジア大会は第1回大会であったが、選手たちはのびのびと競技に臨んでいたように思う。今後も積極的に海外選手と戦う経験を積み、世界の舞台で力を発揮でき、活躍できる選手の育成に努めていきたいと思う。



(文責)谷口 裕美子

Virtus Oceania Asia Games Brisbane 2022

参加国(日本を含む15か国、アメリカ・ブラジルはオープン参加)

参加国: 日本・オーストラリア・ニュージーランド・フィリピン・香港・台湾・シンガポール・
フィジー・マレーシア・マカオ・インドネシア・コロンビア・タイ・アメリカ・ブラジル

第1日 11月8日

競技種目	優勝タイム	1位国名	性別	氏名	予選タイム	予選順位	Virtus新記録	決勝タイム	決勝順位	Virtus新記録
50m背泳ぎ	28.78	日本	男子	籠瀬 嶺	30.60	4位		30.89	4位	
				齊藤 正樹	29.70	1位		28.78	1位	日本新記録
200m個人メドレー	2:26.86	日本	女子	井上 舞美	2:38.30	3位		2:37.56	3位	
				木下あいら	2:27.69	1位	アジア新記録	2:26.86	1位	アジア新記録
100m背泳ぎ	1:01.96	オーストラリア	男子	籠瀬 嶺	1:06.47	5位		1:06.47	5位	
				齊藤 正樹	1:04.42	1位		1:04.10	3位	
				津川 拓也	1:06.75	6位		1:06.94	7位	
				山口 尚秀	1:05.53	4位		1:04.61	4位	
	1:01.96	香港	女子	芹澤美希香	1:17.53	5位		1:17.41	5位	
200mバタフライ	2:08.11	日本	男子	福井 香澄	1:15.80	2位		1:14.26	3位	
400自由形	4:22.90	オーストラリア	男子	松田 天空				2:08.11	1位	世界新記録
				上村 温				4:33.46	4位	
4×100mメドレーリレー	4:05.97	日本	男子	齊藤・山口・松田・籠瀬				4:05.97	1位	世界新記録
	4:48.23	日本	女子	福井・芹澤・井上・木下				4:48.23	1位	世界新記録

第2日 11月9日

競技種目	優勝タイム	1位国名	性別	氏名	予選タイム	予選全体順位	Virtus新記録	決勝タイム	決勝全体順位	Virtus新記録
50m自由形	24.95	オーストラリア	男子	籠瀬 嶺	26.91	9位		26.70	8位	
				齊藤 正樹	25.86	4位		25.38	3位	
	28.56	オーストラリア	女子	芹澤美希香	30.45	4位		30.39	4位	
				福井 香澄	29.97	3位		29.87	3位	アジア新記録
100mバタフライ	1:26.85	アメリカ	男子	上村 温	1:01.55	3位		1:01.90	4位	
				松田 天空	59.71	2位		58.93	2位	
				宮崎 哲	1:01.71	4位		1:00.79	3位	
	1:26.85	香港	女子	井上 舞美	1:13.99	6位		1:12.56	6位	
200m平泳ぎ	2:21.26	日本	男子	木下あいら	1:09.44	2位		1:06.43	2位	アジア新記録
4×100mフリーリレー	1:05.11	日本	男子	津川・齊藤・上村・宮崎				2:21.26	1位	アジア新記録
								3:49.82	2位	

第3日 11月10日

競技種目	優勝タイム	1位国名	性別	氏名	予選タイム	予選全体順位	Virtus新記録	決勝タイム	決勝全体順位	Virtus新記録
200m自由形	1:59.55	香港	男子	上村 温	2:10.87	10位		2:11.88	10位	
				松田 天空	2:04.39	6位		2:01.82	3位	
				宮崎 哲	2:03.47	4位		2:02.61	5位	
	2:11.16	日本	女子	井上 舞美	2:21.05	4位		2:16.40	3位	アジア新記録
200背泳ぎ	2:20.62	香港	男子	木下あいら	2:13.70	1位	アジア新記録	2:11.16	1位	アジア新記録
100m平泳ぎ	1:03.74	日本	男子	津川 拓也				2:25.74	2位	
				上村 温	1:17.11	4位		1:16.69	6位	
				籠瀬 嶺	1:18.63	8位		1:18.00	10位	
				齊藤 正樹	1:17.17	5位		1:16.43	5位	
	1:19.95	日本	女子	山口 尚秀	1:12.54	2位		1:03.74	1位	世界新記録
4×50mメドレーリレー	1:52.20	日本	男子	木下あいら	1:22.70	2位		1:19.95	1位	
	2:11.06	日本	女子	芹澤美希香	1:21.56	1位		1:20.71	2位	
				齊藤・山口・松田・籠瀬				1:52.20	1位	世界新記録
				福井・芹澤・井上・木下				2:11.06	1位	世界新記録

*** (以下、バドミントンの報告) ***

1. 当初の目標と結果

バドミントン競技には、男子シングルスに代表選手1名(中野林太郎)が参加した。今大会におけるバドミントンは、デモンストレーション競技という位置づけであり、表彰・順位に関する扱いは直前まで不明であったため、全勝を目標として参加した。実際には、男子シングルスの場合、予選として参加選手5名による総当たりのリーグ戦と、リーグ戦の1位・2位の選手による決勝戦が行われた。結果として、リーグ選は全勝して1位通過、その後の決勝戦にも勝利し、デモンストレーション競技ではあるが、金メダルを獲得した。

2. 結果に対する評価

選手にとっては初となる国際大会参加であったが、自身のパフォーマンスを十分に発揮することができていた。

3. 各国の参加状況・競技情勢等

参加国は、開催国であるオーストラリア、香港、日本の3ヶ国であった。バドミントン競技においては、II1 カテゴリーのみの実施となり、男女シングルス、男女ダブルスの計4種目が実施された。

各国のエントリー状況

	総選手数		シングルス		ダブルス	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
日本	1	0	1	0	0	0
香港	2	2	2	2	1	1
オーストラリア	2	2	2	2	1	1



競技関係者 集合写真



男子シングルス表彰式

今大会に参加した各国選手について、各国コーチへ聞き取りを行った。その話によれば、香港の選手は競技歴 2~4 年程度とのことであった。また、オーストラリアの選手は、バド

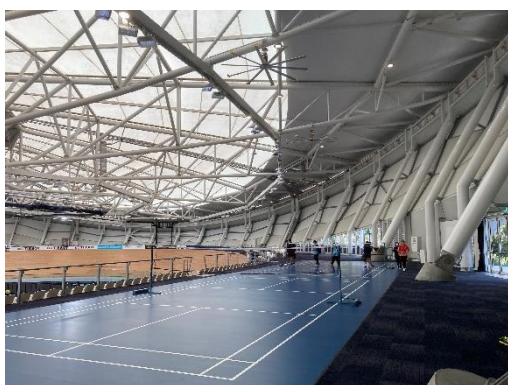
ミントン競技の経験がない現地のテニス選手であり、今大会の練習期間を活用してバドミントンの指導を受け、大会に参加している状況であった。競技歴は一つの指標ではないことに留意は必要だが、日本代表選手の競技歴は10年を超えており、他国の選手と比べ高い競技性を有している印象であった。

4. 感想・課題

【会場・競技運営】

今大会は、2日間に渡って試合が行われたが、その前に2日間の練習日が設けられていた。実際の試合会場は直前まで別種目の会場となっていたため、練習は本番とは別の場所に設けられた特設コートで行われた。特設コートは、参加国数と同数のコート数が用意されていたことから、時間の融通が利く反面、実際の競技会場とは大きく異なる環境であった。一方、試合会場については、コートのラインが他競技のラインと重なっているなど、多少のやり辛さはあったものの、選手の主観としても、プレーに大きく影響するような要素はなかった。

競技運営については、トーナメントディレクター1名、主審2名、メディカルスタッフ1名と、非常に少数の人員によって行われた。特に、審判が主審のみ(通常は線審やサービスジャッジを伴う)という状況は、試合の公式性を欠く印象があったため、将来的には、競技の公正さが十分保たれる体制での競技実施が望ましいと感じた。一方で、バドミントンが初採用となった今大会が、ミニマルな体制の下で滞りなく行われたことは、今後のバドミントン種目の採用においてハードルを下げる結果にも繋がっているものと期待したい。



練習会場



競技会場

【試合内容】

いずれの試合においても、ゲーム内の失点を5点以内に抑えるなど、中野選手が自身のパフォーマンスを十分に発揮して、着実かつ印象的なプレーをすることができていた。

また、中野選手が心身ともに万全な状態で試合に臨めた要因として、日本選手団本部

のスタッフ陣による手厚いサポートや、他競技関係者との交流によって心理的安全が得られていたことによる貢献は非常に大きく、心より感謝申し上げたい。



バドミントン競技の様子

【今後の展望】

今大会において、中野選手が男子シングルスにおいて金メダルを獲得したことは、バドミントン競技において日本の存在感を示す結果となったと考えられる。

各国のメダル獲得数

	金	銀	銅	合計
香港	3	1	0	4
オーストラリア	0	3	0	3
日本	1	0	0	1

※3 位決定戦は行われなかったため、3 位表彰はなし

中野選手の活躍からもわかる通り、日本国内における知的障がい選手の競技水準は世界に通用するレベルであると考えられる。今後は、他種目へのエントリーも見据えた選手の発掘・育成が課題となる。また、今後のバドミントン競技への参加を希望する関係各国と連携した益々の競技振興も期待される。

(文責)内菌幸亮

<資料>

● 男子シングルス 予選リーグ 試合結果

Mens Singles - Group

		1	2	3	4	5
1	Timothy Gould		1-21 2-21 Lost	1-21 4-21 Lost	1-21 1-21 Lost	14-21 21-19 23-25 Lost
2	Rintaro Nakano	21-1 21-2 Won		21-4 21-5 Won	21-3 21-5 Won	21-0 21-0 Won
3	Pak Kiu Tam	21-1 21-4 Won	4-21 5-21 Lost		20-22 17-21 Lost	21-7 21-7 Won
4	Chi Shing Wong	21-1 21-1 Won	3-21 5-21 Lost	22-20 21-17 Won		21-8 21-3 Won
5	Alex Baker	21-14 19-21 25-23 Won	0-21 0-21 Lost	7-21 7-21 Lost	8-21 3-21 Lost	

Standings of Mens Singles - Group

	Points	Played	Matches	Games	Points
1 Rintaro Nakano	4	4	4 - 0	8 - 0	168 - 20
2 Chi Shing Wong	3	4	3 - 1	6 - 2	135 - 92
3 Pak Kiu Tam	2	4	2 - 2	4 - 4	130 - 104
4 Alex Baker	1	4	1 - 3	2 - 7	90 - 184
5 Timothy Gould	0	4	0 - 4	1 - 8	68 - 191

● 男子シングルス プレーオフ(決勝) 試合結果

Mens Singles

Finals	Winner
1 Rintaro Nakano	Rintaro Nakano
2 Chi Shing Wong	21-3 21-4

● 競技入賞者

Winners

Mens Singles

- Rintaro Nakano
- Chi Shing Wong
- Pak Kiu Tam
- Alex Baker

Womens Singles

- Ally Grace Yuet Yeung
- Emma Mangan
- Tsz Ying Luk
- Sabrina Weier

Mens Doubles

- Pak Kiu Tam
 Chi Shing Wong
- Alex Baker
 Timothy Gould

Womens Doubles

- Tsz Ying Luk
 Ally Grace Yuet Yeung
- Emma Mangan
 Sabrina Weier

総括

2019年のグローバル大会に引き続き、本大会もブリスベンで開催されました。大会組織委員会(以下、LOC)のメンバーも当時のメンバーが担い、我々日本チームとしては、十分な意思疎通ができたのではないかと思います。ただ、多くの競技団体からも指摘があった通り、事前の様々な通達(情報)がなされず、現場対応となるケースが散見されたことは事実だったかと思えます。ただ、これはLOCの怠慢では決してなく、コロナの影響で、ぎりぎりまで様々な対応に追われたことが挙げられます。

例えば、①他地域からの参加を認める②その場合、メダル授与および正式記録をどうするか決める③II3のカテゴリーを加速させる④ユースのカテゴリーを創設する⑤デモンストレーション競技にも力を入れるなど。これらの対応を一手に引き受け、スムーズな運営を行うことは、非常にチャレンジなことであり、むしろ、大きなケガなどがなく成功裡に終わられたことは、本当に素晴らしいリーダーシップと連携があったからだと思います。

一方、日本チームにおいても、本部や平野医師を中心に、同大会に派遣するために十分な対策と起こり得る事態を想定した行動指針を明確にするための会議を何度も開催しました。事実、大会期間中に、国レベルで「MySOS」から「VisitJapan」に登録方法が変わるなど、大幅な変更がありました。前出の通り、平野医師や近畿日本ツーリスト様の献身的な対応などがあり、派遣者全員が無事に帰国できたことは大きな自信につながりました。

そして、海外初参加という若い選手が多く台頭する中、合計で53個(金メダル25個・銀メダル13個、銅メダル15個)を獲得出来ましたのは、選手はもとより監督・コーチ・メカニック等多くの方々の支えがあつての事だと心より感謝申し上げます。

最後に、半年後には、フランス(ビシー)でグローバル大会が開催されます。今回、柔道で初めてII2の選手を派遣できましたが、今後は、陸上競技、卓球、水泳でII2の選手派遣が出来る様に様々な環境整備を急ぎたいと思えます。

(文責)斎藤利之